

OPERA
高野聖

× 山田ゼミナール
金沢星稜大学女子短期大学部

オペラデビュー しました



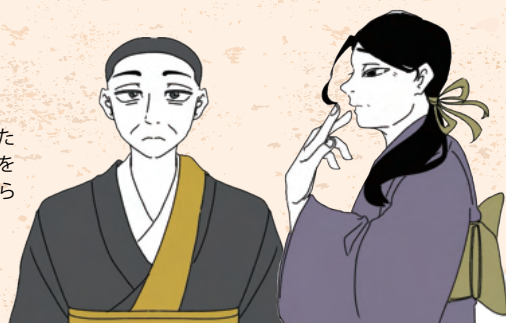
学生が会えるオペラの世界



◆この冊子について

「高野聖」をテーマに、原作を深く読み解いた学生ならではの視点からまとめた冊子を共同制作しました。小説の中で印象的に感じた表現や、登場人物の心理を考察、さらにオペラ台本との比較から見えてくる新たな魅力など幅広い角度から作品を紹介しています。

〈協力〉山田ゼミナール(金沢星稜大学女子短期大学部)





あらすじ

第 1 章

これは敦賀で宿を共にした、高野山の和尚の体験談。

若い僧は旅の途中、難所として名高い天生峠を越えようとしていた。

茶屋を過ぎると周囲に不思議な気配が漂い始める。

僧は蛇を踏み、蛭を払い、山中、若い女と白痴の少年の住む孤家に宿を借りた。

女の振る舞いと妖しく美しい姿に僧は心悩ませる。

一方、板戸の向こうには魍魎魍魎の気配を感じるのだった。

第 2 章

やがて夜が明け、孤家に別れを告げた僧は、未だ悩み晴れず、

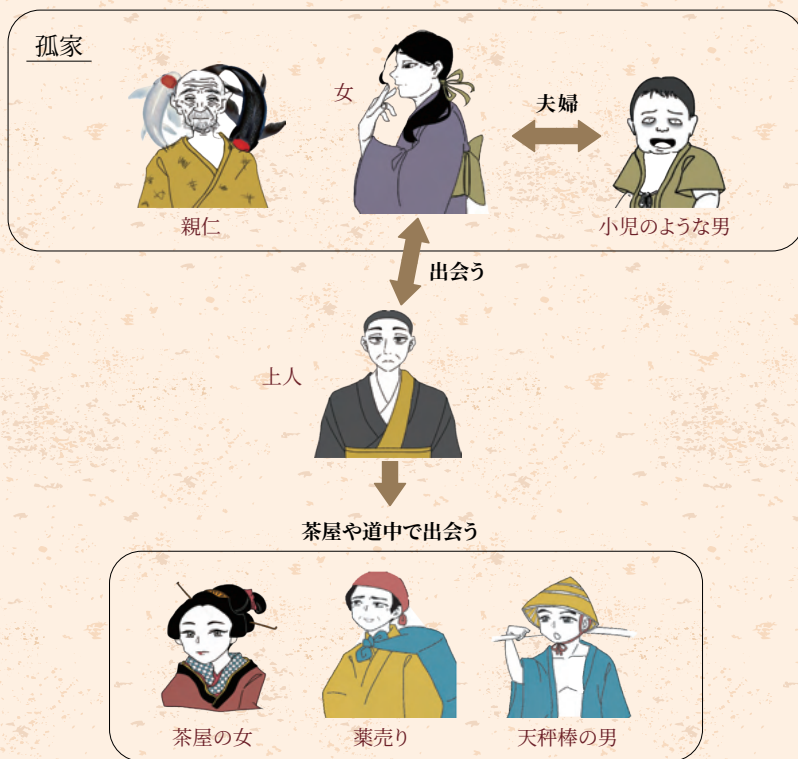
終には人里近い夫婦滝で女の姿を見る。

全てを捨て山へと戻ろうとする僧。

しかし女の身の上を知ることになり我に返った。

女は鬼女か観音か？

和尚は深くは語らず、翌朝、敦賀を後にされたのだった。



登場人物

私(聞き手)



主人公 上人

20歳ほどの修行僧で
飛騨の山を超える途中、不思議な出来事に遭遇する



女

山を越えたところにあるひとつやに住む女
物語の最も重要な登場人物



小児のような男

女の夫とされる太った少年
女が養っている



天秤棒の男

二つに分かれた道で安全な道を教えてくれた親切な男
旧道にはいかないようにと助言してくれる



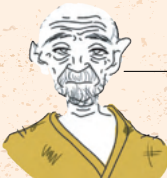
茶屋の女

小川の水が井戸水か川水かを上人が尋ねた茶店の女



葉売り

上人が飛騨の山を超えるときに茶屋で出会った人物
けたいの悪いねじねじした厭な若者として書かれる



親仁

女の下働き



鏡花の台詞1

私はこの世には人智を超えた大なるふたつの力があると信じている。
そのひとつは観音菩薩の慈愛の力、もうひとつは荒々しく恐ろしい魔の力。
これらの神秘的な力の前では人間はただただ無力な存在である。
この世にあるすべてのもの、草木にいたるまで、このいずれかの力が潜んでいる。
しかし、汚れない白い蓮の花に慈愛の力が宿り、
狂い咲く紫陽花に魔の力が潜むとは限らない。
それは心のありようによって、常に変わりゆくのである。



これは冒頭の泉鏡花のセリフだね。



これって「高野聖」に出て来る言葉じゃなくて
泉鏡花が実際に信じていたことなんだよね。



「二つの大なる超自然力があることを信ずる。
一を観音力、他を鬼神力とでも呼ぼうか。」



「妖怪変化の類は鬼神力の具体的現前に外ならぬ。
ぼくは鬼神力に対して大なるおそれをもっている。
けれどもまた一方、観音力の絶大なる加護を信ずる。」って。



そうなんだ!もしかして「高野聖」でいうと
観音菩薩の慈愛の力っていうのが〈上人〉で
荒々しく恐ろしい魔の力が〈おんな〉なのかな?



そうなのかもしれないね。それでも鏡花は
「自分にとっては最もおそろべき鬼神力も、またあるときは
最も親しむべき友たることが少なくない。」
とも言っているんだよね。



なるほど!心のあり方によっては
真逆になることもあるのかもかもしれないね。



実際、オペラ「高野聖」を観た後に
それぞれがどう感じるかも違うのかもかもしれない。楽しみだね。



鏡花の台詞 2

ただただ愛を重んじるのであれば、己の勝手な考えなど生まれる筈はない。
完全なる愛とは無我の境地のこと。
愛に身を捧げるとは、それは苦しみを伴うものであろうと、
喜んですべてを受け入れることだ。
世の不幸、苦しみ、困難は自我ゆえに、他者への、
そして社会への恨みごととして現われるが、
愛によって無我となるならばその苦悩はある筈もない。

翌朝、聖と別れた後、その後ろ姿を見ると、ちらちらと雪の降るなかを
次第に高く坂道を上るその姿、あたかも雲に駕して行くように見えたのである。

これは二つ目の鏡花のセリフ。
明治28年5月の雑誌「太陽」に掲載された
「愛と婚姻」からの言葉なんだよね。

「婚礼は果たしてめでたいのか？」から始まる文だよね。
日本の婚礼は愛の為でなく、社会の為。
夫婦がめでたいのではなく、社会がめでたいのだと。

鏡花が22歳の時なんだって。

22歳にして結婚に対してそんな風に思ってたんだね！

完全なる愛とは無我の境地ってさ…
もう究極だよね。

高野聖の物語とも通じるものを感じるよね。

上人の気持ち、行動が「無我」にあたるのかな。

オペラで「あなたの花びらに包まれれば、この生命、失せてもいい！」
というセリフがあるもんね。
そこの展開はきっと目が離せなくなると思う。

そうだね、ドキドキしちゃう。
舞台の仕掛けや音楽、オペラでどう表現するんだろう。
とっても楽しみだね。



金沢井で♪



鏡花の描写

場面二、魔界の入口（蛇の間道、蛭の森）

血いとか白い歯、白装束とか身体描写の表現って泉鏡花っぽくないけ？

ほうやね、
人間の生々しさと幻覚が入り混じっとる気がするわ。

印象的やったんが、ヒルが吸った血を全部引き出して、
それで山一面が血と泥の大沼になるって表現ねんけど…

それ！ほんと強烈やった！
上人がヒルの雨に降られた後に、肘にヒルがくっついとるんに
気付くんやよね。

ね！その情景もおぞましいけど、
身体中ヒルに覆われるような幻覚まで重なって
現実から離れていく上人の心情が伝わってこんけ？？

恐怖の中で、現実と幻想の境目が溶けていく感じがしたわ。
夢見とるみたいやった。

蛇んとも強烈じゃなかった！？

小説やったら、下っ腹が突っ張って身の毛が逆立って
毛穴が鱗に変わったって表現やったよね

そう、それ！上人て蛇のこと嫌いやけど頑張って蛇跨ごうとした瞬間の
心の動きを体の変化に重ねて描いとるよね

すごいよね、皮膚が鱗になるとか顔色まで蛇になるって
比喩やけど、こっちにはリアルに伝わってくるよね。

鏡花の描写って気持ち悪さと美しさが紙一重じゃないけ。

たしかに。人間の感情やら生理的な反応を
ここまで詩的に描けるんすごいわぁ。

オペラでのこの場面もドキドキしうやあ、楽しみ！



小説で出てくる擬音語

「ねぢねぢ」

～私が今話の序開をした其の飛騨の山越を遣った時の、麓の茶屋で一緒になった富山の賣藥といふ奴あ、けたいの悪い、ねぢねぢした厭な壮佼で。～



金沢弁で「ねじ ねーじ」(ネジが無いね)ってあるけど、それとは違うげんね。茶屋で出会った富山の薬売りのことをねぢねぢって表現しとるけどひねくれた厭な奴って伝わってくるわあ。

「ぶつり」

～肱をばさりと振ったけれども、よく喰込んだと見えてなかなか放れそうにしないから不気味ながら手で抓んで引切ると、ぶつりといってようよう取れる、しばらくも耐ったものではない、突然取って大地へ叩きつけると、これほどの奴等が何万となく巢をくって我ものにしていようという処、かねてその用意はしていると思われるばかり、日のあたらぬ森の中の土は柔い、潰れそうにもないのじゃ。～



ヒルのシーン！

手で抓むだけで気持ち悪いのに、引切るときの「ぶつり」って表現が本当にキモイ!!!ゾっとしちゃう。。

「キヤキヤ」

～私は畏まって聴き果てると、膝に手をついたッ切り 何うしても其処な男女を見ることが出来ぬ、何か胸がキヤキヤとして、はらりと落涙した。～



上人が、小児のような男(女の夫)の唄を聴いたときのこと。女との純粋な繋がりを感じて嫉妬のような胸の痛みを「キヤキヤ」という言葉で表現したのかな。



泉鏡花について

本名	泉鏡太郎
生年月日	1873年11月4日
出身地	石川県金沢町下新町（当時）
没年	1939年9月7日
活動	小説、随筆、戯曲
代表作	外科室、高野聖、婦系図 等
影響を受けた人物	尾崎紅葉
影響を与えた人物	芥川龍之介、谷崎潤一郎 等

鏡花メモ①

泉鏡花は極度の潔癖症でした。それは過去に赤痢を患った経験がありそれ以来、病気に対する恐怖心や衛生観念が強まったと言われています。潔癖症が理由で「生物が食べられない」「刺身なんかは見たくない」と言っていたそうです。



鏡花の一生

1882年(明治15年)	9歳	12月、母鈴 死去(享年28)。
1890年(明治23年)	17歳	尾崎紅葉の作品「二人比丘尼色懺悔」を読み、小説家を志し上京。
1891年(明治24年)	18歳	10月、紅葉宅を訪ね入門を快く許される。玄関番として住み込む。
1892年(明治25年)	19歳	京都「日出新聞」に「冠弥左衛門」を連載。
1894年(明治27年)	21歳	1月父清次死去。「読売新聞」に「義血俠血」を連載。
1895年(明治28年)	22歳	「文芸倶楽部」で「夜行巡查」、「外科室」を発表し、新進作家として認められる。
1899年(明治32年)	26歳	硯友社の新年宴会にて伊藤すず(のちの鏡花夫人)と出会う。
1900年(明治33年)	27歳	「高野聖」を「新小説」に発表。
1903年(明治36年)	30歳	10月、紅葉死去。その後自然主義文学の圧力が強まる。
1905年(明治38年)	32歳	夏に健康を害し逗子に転地療養。
1907年(明治40年)	34歳	「婦系図」を「やまと新聞」に連載。
1909年(明治42年)	36歳	2月東京へ帰京。4月文芸革新会に参加。
1914年(大正3年)	41歳	「日本橋」を千章館より書き下ろし出版。
1925年(大正14年)	52歳	春陽堂から「鏡花全集」刊行。
1937年(昭和12年)	64歳	6月帝国芸術院会員になる。
1939年(昭和14年)		「縷紅新草」を「中央公論」に発表。 9月7日肺腫瘍で死去(65歳)。

鏡花メモ②

“泉鏡花”というペンネームは鏡花の師であった尾崎紅葉が鏡花の本名鏡太郎と、中国の四字熟語「鏡に映る花、水に映る月」という鏡花水月からとったそうです。他にも畠芋之助、兼六園主人、白水生(「白水」は「泉」上下バラした筆名)などがあります。



金沢三文豪について



写真提供: 泉鏡花記念館

泉鏡花

小説家・代表作「高野聖」

明治期から昭和初期にかけて活躍した。
金沢市下新町で生まれ、尾崎紅葉に師事。
小説の他、戯曲や俳句も手掛けた。



本名 泉鏡太郎



泉鏡花記念館

(石川県金沢市下新町2-3)

浪漫と幻想の作家、泉鏡花の生家跡地に建っている。
女川の異名を持つ浅野川界隈の古い町並みの一角にあり、
作品や遺品の数々が展示されている。



写真提供: 徳田秋聲記念館

徳田秋聲

小説家・代表作「縮図」

石川県金沢市で生まれ、尾崎紅葉門下であったが
現実社会に目を向け「新世帯」「あらくれ」などを
発表。明治・大正・昭和にわたって文壇の第一線で
活躍し「自然主義文学の大家」とも称される。



本名 徳田末雄



徳田秋聲記念館

(石川県金沢市東山1-19-1)

秋聲が幼少期を過ごした区域、浅野川にかかる梅ノ橋の
たもとに建てられている。東山の伝統的な建物群の一角
に位置するため、黒瓦屋根の採用、格子を取り入れた外
観、土堀など、金沢の街並みに似合う建物となっている。



写真提供: 室生犀星記念館

室生犀星

詩人、小説家・代表作「小景異情」

石川県金沢市で生まれ、
詩人としては大正期の詩壇に新風を吹き込んだ。



本名 室生照道



室生犀星記念館

(石川県金沢市千日町3-22)

室生犀星の生家跡に建つ記念館であり、直筆の原稿や
愛用品が展示されている。
室生犀星が幼少期を過ごした雨宝院、西茶屋街、忍者寺が
徒歩圏内である。



山田ゼミナール 活動紹介

山田ゼミナールでは、文学や日本語表現を研究しています。私たちが着目するのは「作者の表現の工夫とそれが読者に与える影響」です。単に物語を追うのではなく、作者がなぜ、どのように言葉を選び、構成したのか分析しています。特に地域文学を大切にしたいと考え、「高野聖」についてゼミ内でディスカッションし、作品に込められた多層的なメッセージを読み解くことにチャレンジしました。

ゼミでは、ボランティア活動や文学散歩など実践的な活動も重視していますが、これと並行して、学生一人ひとりが関心を持つテーマで卒業論文を執筆します。研究対象は幅広く、マンガ、アニメ、映画、音楽などといった現代の作品群も「文学」として捉えます。ゼミ生相互の交流と個人でテーマを深く掘り下げる研究を両輪として、教養と人間性を高め合うゼミ。それが山田ゼミナールです！



ボランティア活動



第52回 鏡花文学賞授賞式

毎年、鏡花文学賞授賞式にボランティアとして参加しています。

ボランティアを通してゼミの学びと地域をつなぐ活動ができ、文学に対する探究心がさらに高まります。



金沢文学散歩



着物で散策

文学と金沢の魅力について学びを深める為金沢三文豪の一人である泉鏡花に注目し泉鏡花が生まれ育った街並みを散策しました。

11月には、泉鏡花にゆかりのある神奈川県鎌倉にて文学散歩予定です。



卒業研究



企画立案から執筆に至る地道な研究活動を通して、論理的思考力を身に付け、教養豊かな社会人として活躍することを目指しています。

マンガやアニメなども文学作品として捉え、ユニークな視点で卒論を書く学生が数多くいます。



OPERA「高野聖」× 山田ゼミナール



小説とオペラの台本を読み比べ様々な視点から泉鏡花、そして高野聖の魅力を考察、当冊子にまとめました。

若い世代の皆さんにも伝わるように紹介できれば嬉しいです！



